

ニューヨークタイムズ
2014年7月8日 シアター・レビュー
チャールズ・イシャーウッド

霊が宙を舞い、水の中へ

「プラダを守れ！」～ マンハッタンのアッパーイーストサイドの昼食時、ワインがこぼれそうな瞬間に聞こえてきそうな言葉。この言葉が今年リンカーンセンター・フェスティバルのオープニングを飾る歌舞伎公演で、ニコリ微笑んだ着物姿の日本人俳優から出てくる。彼は最前列の観客にポンチョを配りながら注意を与えているのだ。劇中の滝のシーンで水を浴びることになるということ。この滝の場面が、素晴らしくエンターテイメントな「怪談乳房榎」の見所の一つである。

平成中村座は、数世紀前に書かれた芝居を扱い、歌舞伎の伝統と現代劇の要素をうまくブレンドさせた芝居を展開する。言葉の障害にも関わらず（イヤホンガイド付きの日本語の芝居）、ローズシアターで公演する芝居は、絵師と美しい妻、悪役が繰り広げるメロドラマ。

休憩後の滝は確かに目を見張る場面だが、より素晴らしいのは、主要三役を演ずる中村勘九郎さんの早替わり。彼は、悪役の策略にはまり、後に亡霊となる絵師、菱川重信の従順な下男正助、野心を持って悪役とつるむ悪党うわばみ三次を演ずる。

勘九郎は、2012年に他界した有名な歌舞伎役者の長男（父親の名前を継承）。勘九郎の演技のすごさは、同じ場面で二役を演じ、瞬時に一つの役からもう一つの役に早替わりができるということ。観客は花火のような、奇跡とも思える早替りがあるたびに賞賛を送る。

一つの例として、正助は「重信が殺された」と叫んで寺に入ってくると（彼は共謀者）、逆に笑い飛ばされてしまい、重信は単に休んでいると僧侶たちにさとされる。間もなく、正助は人々の中に消えていき、重信（の幽霊？）が我々の前に現れ、絵に最後の一笔をふる。勘九郎さんの演技の素晴らしさは、彼の役作り（とりわけ正助にはコミカルな味付けをしている）に加え、三役を明確に区別させる衣装やかつら、お化粧などで、より印象を強くし、イリュージョンを作り出すところ。

劇中の一場面、私からそれほど離れていない場所で勘九郎さんが演ずる二役が鉢合わせし、瞬時に早替りをしたことがあった。どうやってこの早替りをしているのか、私には全く説明できない。

伝統的な歌舞伎の芝居が進むなか、勘九郎さんの演技の華やかさはこれだけではない。観客に混ざって役者が英語でちょっとしたコミカルな会話をし（「一人三役驚き！」）、スマホをいじりながら、冗談を飛ばす（一人の役者が安い席に座っている観客に対し「次回はアップグレード」）。古典的なスタイルと現代のユーモアを混ぜ合わせ、違和感を感じさせない演出は、亡き父の後、平成中村座を引き継いだ勘九郎さんの座頭としてのスマートさを示している。

勘九郎さんの弟である中村七之助は、女形（男性で女性の役を演ずる）として、重信の妻、お関に気品と憐れみを吹き込み、他の人と視線を合わせないような控えめな女性を演じている。彼は絹のような美しさで動き、白塗りと黒いかつらをつけていると、とても男性とは思えないほどである。もう一人の主演、悪党、浪江を力強く演じるのは、歌舞伎の伝統に忠実な中村獅童さん。彼の吊り上がった黒い眉は悪意を、薄い一文字のくちびるは危険性を表す。

この演目の最高の見せ場は、舞台の脇で奏でられる付け打ちの音で高揚し、役者たちは古典的な見得をはり、その繰り返される大げさな動作で盛り上げられていく。そして、舞台に欠かせないものとして、歌舞伎ファンからの掛け声が聞こえ、公演が終わるころには知らないうちに大きな掛け声をかけている自分に気づくかもしれない。

公演が始まる前に、全体の流れを把握するため、あらすじを読んでおくことをお勧めする。しかし、書かれたあらすじには、実際の舞台ならではの役回りもあり、混乱するかもしれない。舞台の始まりで紹介される人間関係や役柄、浪江が違った名前で行った悪事については舞台をみているとわかってくる。

もし解説がよくわからなくても、視覚的な心地よさが混乱を癒してくれる。舞台の背景デザインは、パネルに絵を描いたものが多い、シンプルだが印象的でエレガント。場面毎に様々なセットが展開～重信宅、高田の料亭花屋、高田南蔵院、大滝、乳房榎～各場面、白・黒・えんじ色のストライプの歌舞伎幕が引かれます。